

mechanism to disperse. The seeds of such oaks as *Quercus serrata* are considered to be clithochory (e. g. Hotta 1974). Recently Nakao (1978) suggested the possibility of dispersion by some kind of birds. However, it is difficult to decide whether this *Quercus* on the roof might be carried here by birds or monkey or by children's trifling.

The dispersal method of *Viola* is principally mechanical, but seeds of *Viola* have a caruncle and are known to be palatable to ants as their food (Sernander 1906, Makino 1943, Hotta 1974). The seed of *V. mandshurica* apparently has a caruncle and is somewhat sweet (Fig. 3). Thus, the seed of this *Viola* might have been carried on the roof from a ground level habitat by ants. But, there is no denying the possibility that in sticking the shingle bark the seeds might be present here from the beginning.

Table. 2. Distribution of the species and the individuals of woody plants among the four quarters

Quarter	I	II	III	IV
N. of species	19	20	15	18
N. of individuals of woody plants ¹⁾	176	113	66	175

1) By the lack of data, four species, *Schizophragma hydrangeoides*, *Prunus verecunda*, *Rubus palmatus* var. *coptophyllus* and *Sorbus japonica* could not distribute to any quarter.

It may be supposed that differences of the floristic composition and the total number of individuals of woody plants among the four quarters of the roof are affected by their location. In the quarter III the wind flow is obstructed by the less interrupted trunks of ever green conifers (Fig. 1). The front of the quarter I and IV is rather open. The great increase of the individuals of wind dispersing woody plants in the quarter I and IV is thought to be directly related to the exposed situation to wind flow towards these two quarters. Especially the front of the quarter IV is a pond. Birds are resting in the quarter IV much more than in the other three quarters. The predominancy

of animal dispersing woody plants in the quarter IV is thought to be apparently related to this circumstance.

Literature cited

- HOTTA, M. 1974. History and geography of plants. Sanseido Co., Ltd., Tokyo.
 MAKINO, T. 1943. Shokubutsu Ki. Sakurai Shoten, Tokyo [214—215].
 NAKAO, S. 1978. Gendai Bunmei Futatsu no Genryu. Asahi Press, Tokyo [65—68].
 SERNANDER, R. 1906. Entwurf einer monographie der Europaischer Myrmekochoren. Sven. Vet. Akad. Handl. Uppsala.

東京大学理学部附属植物園日光分園内にある四阿の杉の柿葺き屋根 (面積 25.92 m²) に自然に生えた植物の種類とそのうちの木本性植物の個体数, 高さ, 地上部の生重量を調べた。この屋根は 1957 年に葺直したもので, 調査したのはそれから 23 年経過した 1980 年 9 月である。その結果 50 種の高等植物が生育していることが判明した (表-1)。木本性植物の総本数は 534 本, 地上部の生重量は 27.1 kg であった。個体数の多い種はヒノキ, スギ, ノリウツギ, ウメモドキ, リョウブ, アカマツ, ミツデカエデであった。ノリウツギ, ヤマザクラ, ウダイカンバ, カツラなど 8 種 11 個体が高さ 1 m を超していた。最高はノリウツギの 2.30 m であった。50 種のうち, 34 種が風散布, 14 種が動物散布 (すべて鳥による), 2 種 (コナラ, スミレ) がその他の散布方法によって, 散布体がこの屋根に運ばれ定着したとみられる。50 種のうち, ウダイカンバ, ウラジロノキ, アズキナシの 3 種は植物園やその周辺に結実する個体が見当らないから, 日光地方における本来の生育地である奥日光から散布体が運ばれてきたと推測される。コナラとスミレの存在は散布方法と関連して興味深い, 結局のところどのようにして屋根に散布体もたらされたか断定はできない。コナラについては鳥類やサル, スミレについてはアリによる散布が十分考えられるが, 前者では子供のいたずら, 後者では工事時に杉皮に附着してきた可能性を否定できない。四阿の四角錐状の屋根を形作る 4 面の間には種類, 個体数に差があった (表-2)。これらの差は四阿をかこむ周囲の環境に密接な関係があると思われる。

(Received Apr.16, 1981)

○ 井上幸三著: マクシモービチと須川長之助 岩手植物の会 1981.6.10 発行。B 6 版, 302 頁, 2,000 円。

須川長之助はマクシモービチの命に従い, 日本国内を踏査して, 植物採集に従事した人物として知られる。著者は, 長之助と同郷の関係から, 彼の生涯に興味を持たれるまゝ, 長年にわたって研究をつづけて来られたが, その成果がみられる本著が生れた。当時の世相も知れることができ, 興味深い。 (里見信生)

- phism as a phase of molecular evolution. *Nature* 229 : 467-469.
- NEI, M. 1975. *Molecular Population Genetics and Evolution*. pp. 1-288. North-Holland Publ. Co., Amsterdam · Oxford.
- SCHWARTZ, D. and ENDO, T., 1966. Alcohol dehydrogenase polymorphism in maize—simple and compound loci. *Genetics* 53 : 709-715.
- SHAHI, B.B., MORISHIMA, H. and OKA, H.I., 1969. A survey of variations in peroxidase, acid phosphatase and esterase isozymes of wild and cultivated *Oryza species*. *Jpn. J. Genet.* 44 : 303-319.
- SHEEN, S.J., 1970. Peroxidases in the genus *Nicotiana*.

Theor. Appl. Genet. 40 : 18-25.

- WARD, R.D. 1977. Relationship between enzyme heterozygosity and quaternary structure. *Biochem. Genet.* 15 : 123-135.

摘 要

デンブengel電気泳動法を用いて、日本産ツクバネソウ連に属する5種の種子のアイソザイムを、アルコール脱水素酵素 (ADH)、酸性ホスファターゼ (Acp)、パーオキシダーゼ (Px)、6-グルクロン酸脱水素酵素 (6PGD) の4酵素種について調査した。遺伝様式が解明されているアルコール脱水素酵素のアイソザイムについては、未発表のデータも加えて、特にSS型アイソザイムがかなりの種で見られる事を述べた。

(Received Sept. 24, 1981)

○ 続 宮城の自然をたずねて——海浜・湖沼の植物——宮城植物の会編著 第一法規出版株式会社 (107 東京都港区南青山2-11-17, 振替口座東京3-133197) 発行 (昭和56年12月), B24 取版, 232頁, 定価1,900円 (〒300円)

先に刊行された“宮城の自然をたずねて——野山の植物——”では、宮城県の代表的な高山である蔵王山と仙台市の裏山である太白山・佐保山をえらんで、丘陵地から高山帯に生育する樹木・草本100種を取り上げて紹介されたが、本書はそれに引続き、海浜として仙台市の海岸部に位置する蒲生潟周辺をえらび、そこに生育する海岸植物を、湖沼として県北の渡り島の渡来地として名高い伊豆沼を取り上げ、そこに見られる水生植物を紹介している。

編者は、自然に親しんだり、ふるさとを意識したりするには、そこに生活している植物と会話できることが必要で、植物と会話ができるためには、そこに生活している植物の名前を知ることが早道であると述べて居られる。本書を通じて、全国的に破壊が進む海岸植物・水生植物に対する愛護の心が育てられるならば真に幸である。(里見信生)

○ 種子の本 (続) (古池 博) Hiroshi HURUIKE: Further Notes on the Handbooks of Seeds

前回に続いて、種子の同定に役立つ参考書で、比較的入手しやすい本を紹介したい。

① 沼田 真 編: 1981. 種子の科学—生態学の立場から—, 研成社 東京。

種子生態学談話会の活動を背景にして生まれた好著で編者をふくめて7名の研究者が執筆されている。副題の通り、種子生態学の現在の到達点を平易に紹介することに焦点がすえられているが、第7章は種子図譜となっており、笠原安夫氏が担当されている。口絵には96種の草本種実(雑草や人里植物が多い)の走査型電子顕微鏡写真があり、本文にその解説がのせられている。また、氏が明らかにされた種実の表皮細胞構造の40型の一覧表がある。走査型電子顕微鏡の特性(焦点深度の深さと分解能の良さ)が十分、発揮されている。本書でも強調されている通り、「植物を見る第三の目」としての役割が納得でき、将来における発展方向の一つが説得力をもってしめされている。もっと多数の種類についての、この方法による種子図譜が、一般に公にされることを期待するものである。

② 長田 武正: 1981. 原色野草観察検索図鑑, 保育社。

361種の野草について精密な図がのせられているが、そのほとんどに種実の図解がある。従来の図鑑類の種実図に比較して、大きくかつ精密な点に特徴がある。

③ CORNER, E. J. H. 1976. *The Seeds of Dicotyledons. I, II*, Cambridge University Press. London.

これは二巻からなる大著で、第一巻には本文が、第二巻には図版がのせられている。著者の関心は、双子葉植物の正しい系統分類にある。双子葉植物の分類は従来、花を重視してきたが、これは誤っている可能性があり、種子こそ、本質的な意義をもって著者は強調する。各科ごとに大きくて精確な種子の解剖図と記載がのせられているが、これは、種子の進化にもとずいて、新しく、著者によって示された、分類体系の根拠となるデータである。この著作を読むと、従来からの種子の分類が、人為分類の方法によっていたのに対して、系統分類の方法によって代えられる方向にあることが理解できる。

- 27 (4) : 189-194.
- 黒崎史平, 福岡誠行. 1972. 日本海要素の生態学的研究
1. 頌栄短大紀要, 4 : 15-32 (上記より間接引用).
- 永井和夫. 1973. 盆栽のつくり方. pp. 89-.
- 沼田 真. 1955. 植物生態系の形成と発展. 生物進化,
2 (2-3) : 56-67.
- . 1959. 植物の適応と進化 — 生態学の立場から
—, *ダーウィン進化論百年記念論集*, pp. 171-179.
- MAKINO, T. 1913. Observations on the flora of Japan.
Bot. Mag. Tokyo, 27 ; 124.
- 正宗巖敬. 1953. 生活型より見た二, 三の植物. 北陸の
植物, 2 (1) : 4-6.
- . 1957. 北陸の植物, VI : 98.
- 野本宣夫. 1977. 遷移の機構, 光と遷移. 沼田 真(編) :
群落の遷移とその機構, pp. 225-236. 植物生態学講
座4. 朝倉書店.
- 及川武久. 1979. 光合成産物の分配と成長. 岩城英夫
(編) : 群落の機能と生産. 植物生態学講座3. 朝倉書
店.
- 奥富 清. 1977. 熱帯, 亜熱帯の森林と低木林. 石塚和
雄(編) : 群落の分布と環境. 植物生態学講座1. pp. 64
—, 朝倉書店.
- ORIAN, G. H. and O. T. SOLBRIG. 1977. A cost
-income model of leaves and root with special
reference to arid and semiarid areas. *Amer. Natur.*
111 : 667-690.
- PARKHURST, D. F. and O. L. LOUCKS. 1971. Optimal
leaf size in relation to environment. *J. Ecol.* 60 : 505
—537.
- PIANKA, E. R. 1978 (伊藤嘉昭ほか訳 1980). 進化生態
学 第2版. 蒼樹書房.
- RICHARDS, P. W. 1952. (植松真一, 吉良竜夫訳 1978).
熱帯多雨林, pp. 89-99. 共立出版.
- 佐藤 明. 1977. スギ幼齢林木の木圧部ポテンシャルの
日経過と季節変化. *日林誌*, 59 : 293-297.
- SCHMITHÜSEN, J. 1961. (宮脇 昭訳 1968). 植生地理
学, pp. 134-136.
- 四手井 綱英. 1976. 森の生態学. 24 pp. 講談社.
- 菅沼孝之. 1970. 白山の高茎草原群落. 日本自然保護協
会中部支部白山学術調査団(編) : 白山の自然, pp. 157
—175. 石川県.
- 杉本順一. 1954. 本州内帯系の植物地理要素について.
北陸の植物, III : 53-57.
- 鈴木時夫, 鈴木和子. 1971. 日本海指数と瀬戸内指数.
日本生態学雑誌, 20 (6) : 252-255.
- 竹内 亮. 1966. 北上山地の落葉広葉樹天然林の更新に
関するいくつかの問題 — 特に皆伐跡地の天然更新に
ついて —. *ミチューリン生物学研究*, 2 (2) : 257-
270.
- 田崎忠良. 1978 a. 日本の自然をみなおす — 水要素を中
心として —. *科学*, 48 (10) : 593-601.
- . 1978 b. 水と植物. 田崎忠良(編) : 環境植物
学, pp. 123-149. 朝倉書店.
- 東京天文台. 1978. 理科年表. 昭和五十三年・気 18-19.
- 遠山富太郎. 1976. 杉のきた道, pp. 178-192. 中央公
論社.
- 津山 尚. 1949. ユキツバキに就て. *植物研究雑誌*, 24 :
97-100.
- . 1956. 雪椿について. *自然科学と博物館*, 23 :
119-135.
- TUYAMA, T. (Ed). 1968. *Camellias of Japan*. pp. 1-12
Takeda Science Foundation. Osaka.
- 馬淵智生. 1980. スハマソウとミスミソウの集団変異.
種生物学研究, IV : 54-67.
- 牛島忠広. 1967. 高等植物の水欠乏と光合成. *生物科
学*, 19 : 66-72.
- WOODCOCK, H. B. D. & STEARN, W. T. 1950. *Lilies of
the world*. pp. 368-373. Country Life Limited.
London.
- YOKOI, Y. 1976a. Growth and reproduction in higher
plants. I. Theoretical analysis by mathematical
models. *Bot. Mag. Tokyo*, 89 : 1-4.
- . 1976b. op. cit. II. Analytical study of growth
and reproduction of *Erythronium japonicum*. *Bot.
Mag. Tokyo*, 89 : 15-31.
- 横井洋太. 1981. 物質生産と種の生活. 野本宣夫, 横井
洋太 : 植物の物質生産, pp. 97-150. 東海大学出版会.

Received March 25, 1981

○ 福岡の植物 第7号 福岡植物研究会(福岡市東区箱崎6丁目10の1, 九州大学農学部造林学教室内, 振替口座
福岡5060), 1981.12発行. B5版, 132頁, 頒価1,500円(送料240円)。

第6号まで, 発行所の名前は“福岡県植物誌編纂委員会”となっていたが, 今号より変更されている。13篇登載され
ているが, 中でも本会々員益村 聖氏は“福岡県産主要植物図譜2”, “カヤツリグサ科植物における草の表面模様の
観察(1)”の2篇を猪上信義氏は“宗像市城山のムクロジ林”, “大机島の植物”, “キレハマメグンバイナズナ(福岡県
稀産植物群調査)”の3篇を筒井貞雄氏は“ツクシオオガヤツリの発見地の現状と分布”, “キビヒトリシズカの新産地
と分布”, “オニコナスビの分布と特徴”の3篇を発表しておられる。(里見信生)

参考文献

- 朝比奈泰彦, 1931. イワタケとタカネイワタケ. 植研. 7: 143-146.
- 朝比奈泰彦, 1939. 日本陰花植物図鑑. 三省堂. pp. 694-701.
- 朝比奈泰彦, 1960. 東三河の地衣相. 蘚苔地衣雑報. 2 (3): 29-32.
- 生駒義博, 1956. 中国地方イワタケの分布と生態. 蘚苔地衣雑報. 1 (3): 2-3.
- 神谷 平, 1978. 韓国と愛知県のイワタケ. 植物と自然. 12 (4): 25.
- 加藤君雄・熊谷 隆, 1960. イワタケは秋田県にも産する. 蘚苔地衣雑報. 2 (2): 18-19
- 小林 勝, 1957. 福島県下のイワタケ産地. 蘚苔地衣雑報. 1 (9): 2.
- 黒川 道, 1960. イワタケについての話題. 蘚苔地衣雑報. 2 (2): 16-17.
- 黒川 道, 1974. 始めて天然記念物に指定された地衣「オウラヒダイワタケ」ライケン. 2 (1): 3-4.
- 佐藤正己, 1955. イワタケの分布. 蘚苔地衣雑報. 1 (1): 2.
- 佐藤正己, 1955. イワタケの産地追加. 蘚苔地衣雑報. 1 (2): 2.
- 佐藤正己, 1958. イワタケの分布と生態. 植研. 33: 110-115.
- 佐藤正己, 1959. イワタケの分布と生態. 蘚苔地衣雑報. 1 (22): 14.
- 佐藤正己, 1960. 三陸沿岸地帯におけるイワタケの分布. 蘚苔地衣雑報. 2 (4): 46-49.
- 佐藤正己, 1977. イワタケ物語. 植物と自然. 11 (11): 10-13.
- 高木典夫, 1957. 東京都下のイワタケ分布. 蘚苔地衣雑報. 1 (12): 3-4.
- 田仲善二, 1955. 大和大峯山の地衣類. 地衣学雑報. 13: 49-50.
- 山中二男・吉村 庸, 1961. イワタケ群落についての二三の観察 (珪岩上の植生 3). 植研. 36: 193-200.
- 山中二男・吉村 庸, 1962. イワタケ雑談 — とくにその食べ方. 蘚苔地衣雑報. 2 (10): 151-152.

摘要

本研究の目的は地衣類の1種イワタケ *Gyrophora esculenta* MIYOSHI の生態的調査である。この地衣は日本語ではイワタケ、韓国語ではシャッキといわれている東洋特産のもので、韓国では日本と同様に料理にされ医薬にもされているが、特に韓国人には大変高貴な料理として尊ばれている。

地図に示したように韓国では多くの地理的分布が既に知られている。これらのうち、智異山は筆者らの1人である金によって生態学的に調査された。そのうえ、他の筆者である神谷は中部日本の生態的研究と比較した。

本研究の結果、筆者らはその分布が岩塊の南側に多く、次は東と西側であるが北側の部分には全くなかったことが分った。これは日本のように韓国の智異山も全く同じであった。

それ故、筆者らは、イワタケはシダ類の1種イワヒバ *Selaginella involvens* SPRING のように陽性で乾性の地衣である、という結論に達した。

Summary

The purpose of this study is to investigate the ecology of *Gyrophora esculenta* MIYOSHI, a lichen species. This lichen is one of the oriental specialities, which is named "Iwatake" in Japanese or "Sheakki" in Korean. It is often used in dishes in Japan, but also used as a drug material in Korea.

As shown in the map (Fig. 1), many localities of this lichen have been recorded in Korea. On Mt. Jiri (Mt. Chii-san in Japanese), the ecology of this lichen was studied by Kim. Kamiya has undertaken a comparative field survey of this lichen species in central Japan.

As a result of this study, the present authors found that *Gyrophora esculenta* mainly occurs on the southern side of rock masses, but less frequently on east and west sides, and actually no occurrence on the northern side. This tendency was the same on both Mt. Jiri in Korea and mountains in central Japan. Thus, *Gyrophora esculenta* is a lichen species which mainly occurs on sunny and dry sites on the rocks, just comparable to a fern species, *Selaginella involvens* SPRING.

○ 茨城県植物誌 鈴木昌友・清水 修・安 昌美・藤田弘道・中崎保洋・和田尚幸・野口達也共著。B5版, 340頁, 定価4,800円。昭和56年9月, 茨城県植物誌刊行会(代表者 安 昌美, 〒310 水戸市見和2-186-2発行。

著者の一人, 鈴木昌友氏等によって「茨城県植物目録第一版」が出版されたのは, 昭和31年(1956)である。本書は, それ以来茨城大学を卒業された共著者等が, 鈴木昌友氏を核とし, 強固な団結のもとに気ながく増補訂正を続けて来られた。それ故に, まさに茨城県植物目録の決定版ということができよう。(里見信生)

支部の会のほか、お互いに行き来して、私もよく歩いたが、彼もよく歩いた。そうして珍種を発見しては、みんなを驚かした。

天草下島の福連木で、フクレギシダが再発見され、同時に、フクレギクジャクも発見されて、その後、兩種共それぞれ新産地が3ヶ所発見されたと思うが、日置さんは、冠岳でフクレギクジャクを、八重山で兩種を同時に発見する幸運に恵まれた。

それは、彼が大変熱心で、学究的な採集家であり、シダ一すじに山を歩いてきた賜であると思う。

元気だった彼も、昭和50年大分県の大会のあと健康を害し静養なさっていたが、53年には健康を回復し、霧島山麓での忘年採集会に元気な姿をみせ、盃を手にした笑顔をみせて下さった。彼は、ほんとうに焼酎がきで、朝からおみきをあげないと調子が出ないようであった。

56年5月初め、川原さんから電話があり、大工園さんと薩摩布計に行きたいというので、私が案内することになり、日置さんも参加なさるといっているので楽しみにしていたのに孫が来るからといって姿をみせなかった。

2日後、突然の訃報に接し、愕然とした。

無欲恬淡、飄然とした姿の日置さんは、忽然と、あの世へと旅立たれた。まことに、痛恨の極みである。ここに思い出の一端を述べて、心から哀悼の意を表したい。

○ 浜田 稔先生の御逝去を悼む (里見信生) Nobuo SATOMI: Obituary of the Late Dr. Minoru HAMADA

浜田 稔先生は1981年9月29日におなくなりになられました。先生は、昭和45年4月、本会に御入会下さいまして、本誌に対し、何かと御指導をいただきました。会員の方々とともに御冥福をお祈り申し上げたいと存じます。

先生は、幼い時よりランを好まれ、特にツチアケビの発芽の御研究から、ランの菌根菌の分類同定という御仕事に進まれ、日本の南北の同じ種類から同じ菌が出るか、同地に生ずる他の種類の菌はどうか、Albinoのようなものはどうか、など多くの問題に熱意をもって取りくんで居られました。又、一方ではマツタケの調査にも従事されて、極めて多くの知見を御持ちでございました。石川県で、先生に御願ひして松茸山の調査をしていただいた事がありましたが、その際、私は先生の該博な御知見に接し、ただただ驚歎致しましたと同時に、学問に対する考え方を思い知らされた次第でした。

御奥様より御訃報をいただき、誤報であってほしいと思います。そのわけは、上述のように多くの御仕事をしておられるにもかかわらず、先生は、完全主義と申しましょうか、中途半端な御発表をなさいません。それだけに活字になったものが少ないように見えます。したがって、生意気ながら、是非書いて下さるよう申上たことがありましたが、幽明相隔った現在、せん方ないことながら、冥土に届けとばかり、大声を張りあげて、おうらみを申し上げたい気持です。

○ 北海道の高山植物と山草 伊藤浩司著。B5版、230頁(内索引14頁)、定価4,300円(〒300円)。昭和56年6月、誠文堂新光社発行。

本書は、ガーデンライフの別冊で、5~172頁に、梅澤 俊氏が撮影された美しいカラー写真679枚が納められ、それぞれの種類について、生育地・全体の形・茎の高さ・葉の形・花期・花のつき方・花や花冠の形と色・果実の簡単な図が適切な記述がなされている。

北海道の高山植物をあつかった既刊書に、創土社発行の原 秀雄編：北海道の高山植物があるが、これは豪華本で価格が高く、たやすく手に入れることができないが、本書は、比較的入手しやすく手頃なものと言えよう。

本文では、I 北海道の植物、II 分類のむづかしい植物の見分け方、III 徹底したい自然保護の3項からなり、その末尾に参考文献が挙げられているが、その中には、本誌に掲載された論文が多数あり、北海道の植物について、本誌も大いに貢献することができたことをよろこばしく思っている。(里見信生)。

○ 新園芸教室 湯浅浩史著。11.5×19.5 cm, 236頁。定価980円。昭和56年7月25日、八坂書房発行。

家庭でやさしく楽しめ、話題性に富む、新鮮な内容のコラムとして、朝日新聞の家庭欄に連載したものを、単行本としてまとめられた。1977年10月25日、第1回の「見かけ違いが同じ仲間」から1979年12月26日、第104回の「花から根までおいしく」までの104篇である。内容は、著者が各地で見聞したり体験した身近な園芸をエッセイ風書きつづけたものである。したがって、各篇すべて楽しく拝見した。例えば、18頁の「金の成る木」を私もいつかつくって、知人に進呈してみたいと思っている。(里見信生)

- 高橋 秀男 229 相模原市大野台 7-21-9 → 247 横浜市戸塚区鍛冶ヶ谷町 251-8 (関東)
 田中 秀子 537 大阪市東成区中道 2-14-20 → 078-17 北海道上川郡上川町層雲峡温泉ホテル大雪内 (北海道)
 館岡 亜緒 300-31 茨城県新治郡桜村天久保国立科学博物館付属筑波実験植物園 → 305 茨城県新治郡桜村天久保国立科学博物館 (関東)
 安井 一朗 930-11 富山市布市 98 富山南高等学校 → 930-11 富山市安養寺 266-19 (中部)
 湯浅 浩史 220 相模原市上鶴間 3897 相模大野住宅 1-5 → 228 相模市相模大野町 6-20-1-5 (関東)

新 入 会 員

- 昭和56年 6月13日 アブック社 〒247 鎌倉市岩瀬905 (関東)
 6月16日 星野 義延 〒167 東京都杉並区桃井 4-6-13 (関東)
 6月20日 大沢 達郎 〒033 三沢市松園町 1-1 三沢高等学校 (東北)
 6月22日(再入会)上野 雄規 〒989-02 白石市字十王堂北46の 6 (東北)
 7月17日 小島 寛 〒930 富山市五福3190富山大学教養部 (中部)
 7月27日 小川 吉平 〒243 厚木市温水13アジア航測株式会社厚木技術センター環境事業部植生課 (関東)
 8月 4日 佐々木 晋 〒979-02 いわき市四倉町駒込字上の内106-5 (東北)
 8月 4日 薄葉 満 〒970 いわき市平中平窪 1の16の 3 (東北)
 8月 4日 湯沢 陽一 〒970 いわき市自由ヶ丘10の 9 (東北)
 8月19日 安部ひとみ 〒243 厚木市温水13アジア航測株式会社厚木技術センター環境事業部植生課 (関東)
 8月19日 弦牧久仁子 〒243 厚木市温水13アジア航測株式会社厚木技術センター環境事業部植生課 (関東)
 8月31日 長瀬 秀雄 〒506 高山市西之一色町 3丁目 (中部)
 9月15日 富岡 和俊 〒454 名古屋市中区川区野田町東邸廻り 151八王子荘 6号室 (中部)
 10月 2日 石川県林業試験場 〒920-21 石川郡鶴来町三の宮 (中部)
 10月 8日 長谷川 栄 〒061-21 札幌市南区真駒内泉町 4 F-15-5 (北海道)
 10月13日 吉見 書店 〒420 静岡市七間町 3 (中部)
 10月13日 山口 明夫 〒633-21 奈良県宇陀郡大宇陀町西山1037-5 (近畿)
 10月20日 平田 浩 〒691-01 鹿児島市下福元町994-3 (九州)
 10月29日 石塚 和雄 〒990 山形市小白川町 1丁目山形大学教養部 (東北)
 11月 5日 堀野 末男 〒922-04 加賀市作見町カ 28 (中部)
 11月 8日 島山 茂雄 〒028-34 岩手県紫波郡紫波町片寄字川原67の 2 (東北)

退 会 会 員

- 昭和56年 9月15日 大谷 茂 死亡による。
 9月15日 日置 正臣 死亡による。
 10月 2日 千木 容 〒920 金沢市城南 2丁目42-14 (中部)
 11月 5日 八木 馨 〒229 相模原市大島3318
 11月15日 浜田 稔 死亡による。

○ 広島県植物図選 I 井波一雄著。B5版, 232頁, 定価3,000円(〒300円)。昭和56年 6月, 博新館(広島市中区三川町 9-6, 振替広島9301)発行。

“日本スミレ図譜”の著者として知られる井波氏の植物画は、定評高いものであるが、この本の100図において、益々その力量を発揮されたように思われる。つづいて、100種ずつをまとめ、II以下を発行してゆかれる由であるから、その出版が非常にたのしみである。(里見信生)

○ ウスアカミヤコイバラ (堀野末男) Sueo HORINO: A New Forma of *Rosa paniculigera*

昭和48年6月9日、淡紅色の花を着けているミヤコイバラを発見、標本を採集した。

加賀市尾中町地内、丘陵台地の林縁、農道わきである。附近は地下水の湧出地帯で、ハンノキ・イソノキ・サワギキョウ・ノハナショウブ・ミズスギ・アリノトウグサ・モウセンゴケ・コモウセンゴケ・ミズゴケの出現する湿地である。

新梢、等に徒長枝は赤味を帯びており、花卉はいずれも淡紅色で美しい。昭和56年6月15日(開花最盛期)に改めて標本を採集し、ここに発表させていただくことにする。

Rosa paniculigera MAKINO form. *rosiflora* HORINO form. nov.

Flores rosi.

Nom. Jap. Usuaka-miyakoibara (nov.)

Hab. Honshu: Onaka-cho, Kaga-shi, Ishikawa Pref. (Sueo HORINO; Jun. 15, 1981; Holotypus in KANA no. 100738)

○ トゲナシモミジイチゴ (井手一洋) Kazuhiro IDE: A New Forma of *Rubus palmatus*

昭和56年4月22日、石川県能美郡辰口町鍋谷地内の、日あたりのよい路ばたに、モミジイチゴを見つけ、採集し、観察したところ、刺が全くみあたらない。未だ未発表のようであるから、これをトゲナシモミジイチゴと命名し、ここに発表させていただくことにする。

なお、平素御指導をいたゞいている金沢大学理学部の里見信生先生に感謝の意を表する。

Rubus palmatus THUNB. form. *inermis* IDE form. nov.

Caulis toto inermis.

Nom. Jap. Togenashi-momiji-ichigo (nov.)

Hab. Honshu: Nabetani, Tatsunokuchi, Nomi-gun, Ishikawa Pref. (Kazuhiro IDE; Apr. 22, 1981; Holotypus in KANA no. 97747).

○ 日本の野生植物, III. 草本 合弁花類 佐竹義輔, 大井次三郎, 北村四郎, 亙理俊次, 富成忠夫 編。1981。平凡社。26.5 cm×20 cm(クテ×ヨコ)。カラー図版224ページ。本文235ページ。定価14,000円(特別定価13,000円)。

日本の種子植物のすべての草本を収録する図鑑として企画されたものの第III分冊(第1回配本)である。この図鑑の特徴は図がすべてカラー写真によっていることで、全巻合計3,234点もの写真が使われる予定とのことである。執筆には編者の佐竹義輔, 故大井次三郎, 北村四郎氏のほか14名の分類学者があたられ、日本の植物分類学を代表する人々によって、共同で作られた植物誌としても意義が大きい。

説明文は平易で、写真と照合して使えば、専門家でなくても十分活用できるであろう。写真には撮影の年月日と場所のデータが付記されており、資料的価値が大きい。亙理俊次, 富成忠夫の両氏は植物写真の分野で高名な方々であるが、72の個人あるいは機関が撮影した写真を記録性という点からだけではなく、それぞれの植物の持ち味や美しさも表現されるように編集されているので見るだけでも楽しい。

十分なことをいえば、撮影のポイントが形態と生態の一方にしぼり切れていないためどっちつかずの写真があること、高倍率のマクロの写真であまり良くないものがあることなどがあげられよう。なおI-単子葉類, II-離弁花類も1982年3月下旬までには刊行される予定である。(古池 博)

○ 洋種山草 森 和男著。A6版, 152頁, 定価500円。昭和56年2月, 保育社発行。

本書は保育社のカラーブックス524号であるが、著者には既に同名の著書があり(本誌第26巻第4号に紹介した)、少々まぎらわしい。しかし、カラー写真は美しく、線画とあわせて、珍しい外国産の山草を知ることができてたのしい。また、本文には興味ある記事、例えば、“プラハの山草会”、“雨のドロミテにて”、“アラスカで出逢った花”、“ヒマラヤの青いケシ”などの他、栽培方法(用土・実生・灌水など)、輸入についての注意など細かい点まで書かれている。(里見信生)